

バイロン小論

宇佐美道雄

A SHORT PAPER ON BYRON

MICHIO USAMI

It is the subject matter in the short paper to make an attempt to put forward one of the motive agencies of the Romantic Movement perspicuously shown in Byron's works throughout his life, and the analysis is carried out by means of the sociological interpretation of literature. The paper begins with the chapter titled 'Methodology' manifesting the methodical idea that it is sometimes required for the literary criticism towards Byron's works to be made apart from so called 'Byron Mystery', because any literary phenomenon can be regarded as a sign or a trace in which the social organism reveals itself. In the succeeding chapter titled 'Substructure' the Economical Structure of English society in the age of Romanticism is analysed and its principal character is examined, resulting that the Productive Power rapidly increases, the Productive Relations shift, two classes that will never be in unity come into existence and the contradiction pervades into all phases of the society. 'Mentality of the Age' is the title for the third chapter where the fact is stated that the invisible but veritable mentality of the age, inevitably ushered by the social character of the age as mentioned in the previous chapter, can be also found in all Byron's works through his insight into the actual contradiction between ideal and reality or through his paradoxical attitude towards love and hatred, defiance and despair. The development of Byron's dual mind is marked and traced in the fourth chapter 'Duality' and the several dialogues in 'Manfred' are pointed out as a spot of climax where the poets's inner conflict was driven into the extremity and his inner flight towards reconciliation began. Symbolized by the next title 'Escape and Elevation', the reconciliation is interpreted in the fifth chapter. As well as the social conflict of the age had been reconciled into the national prosperity of the glorious Victorian age, the inner contradiction of romantic poets including Byron had to be escaped and elevated towards a higher point where the contradiction itself has no significance any more, and this makes it comprehensible that some romantic poets went to exoticism or medievalism and some of them to supernaturalism or mysticism. Cynism was the highest stand-point that Byron had attained after a long and hard way of his inner struggle, and it found a literary manifestation in his 'Satirical Literature' which was the title of the last chapter. It is concluded there that in his later satirical poems, particularly in 'Don Juan', he made a final and yet original flight towards an utmost position representing the intrinsic character of the Romantic Movement.

方法論

バイロンの生涯に次々と起つた異常ではあるけれども偶然の出来事 — 家柄・不具・美貌・恋愛・悪徳・戦没 — の総てが、いつか "Byron Mystery" を作り上げ、それは百年以上にもわたつて彼の作品への正しい考

察と評価とを妨げてきた。今や、「この詩人の恋愛事件が非難されたという事実も、彼がその一生を自由の理想に捧げたという事実も、バイロンが文学の世界で占めるべき地位にいさかかも影響するものではない。詩を道徳的に批判しようとするなら、証拠は詩そのものの中に見出すべきである。」という H. Read の言葉は正しい。詩人の実人生が作品の解釈に無用の混乱を与え、作品の世界が詩人の実人生に不必要なセンサクを促すという悪い循環、バイロン伝説に更に新しい何かを加えようと競う愚を止めるためには、あまりにも多彩な彼の伝記からしばらく遠ざかる必要がある。他のどの詩人の場合にもましてバイロンの場合には、その実人生と作品世界とは峻別されねばならぬのである。このことに関するかぎり、「吾々の批評眼を彼の書いたもの自体に注ぐならば、百年以上にわたって本当の問題の所在をくもらせてきた評論、一方的批判、附随的醜聞等の大部分を無視することが可能になるであろう。問題は元來詩に関するものなのであるから。」という H. Read の発言は再び正しい。一人の詩人の詩の製作及び作品世界の展開をその根底において規定している或る契機乃至作因を想定する場合、その approach の仕方にはさまざまな変化と多様性が想像されるが、道程の多岐にもかかわらず、この詩人に対して純粹に外在的に作用した或る力、人間の意志や意欲、意識や認識の力を超越して純粹に外在的に作用した或る力を予見し、それを見究めようとする点においては総て同一であるといつてよい。

文学運動というものを絶えず変化し発展しつづける社会という有機体が示す諸々の現象の一つの現われとしてとらえるとき、それは唯物史観を通つてプレハーノフの公式に導かれる。バイロンの詩の本質を全く局外者の立場から、最も鋭く洞察した言葉の一つとしてしばしば援用されるイギリスの宰相 S. Baldwin の感想「対ナポレオン戦争が終つた時、及びそれにつづく時期に、イギリスにもヨーロッパ大陸にも漲つていた時代精神は、一つの啓示を無意識のうちに待ちこがれていた。バイロンはその啓示を与えた。意識していなかつたにしても、時代精神が求めていたものは精神力、体力、行動の三つであつた。この三つのもを描いてみせた点ではバイロンに及ぶ作家はかつていなかつた。」この発言は、プレハーノフの設定した「社会的人間心理」というものを無意識のうちに察知して、一人の詩人の詩の本質を見事に洞察した一例とも考えることができる。

唯物史観に基づく芸術社会学派の主張は、文学を対象とした批評活動に適用する場合、それ自身で充足するに足らないことは勿論としても、一個の作品にせよ、一人の作家にせよ、一つの流派にせよ、その存在を根底において規定している moment 或いは motive の或る一面、その対象を導いている idea の必然不可避的要因、特にその社会的基因、つまり、その対象に対して純粹に外在的に作用してその存在を規定した或る力の一つというものを抽出してくるのには極めて示唆に富んだ一方法論とみなすことができる。

下 部 構 造

バイロンを著しい代表者の一人とするイギリスの浪漫派運動は、通常文学史の上では、Dr. Johnson の逝いた年によつてその開始を区切り、Reform Bill の通過した年によつてその終末を区切る等のごとく取り扱われるが、正確のためには、文学史の上では古典主義文学の時代とヴィクトリア朝文学のそれとの間に介在し、政治史の上ではハノヴァー王朝の中期からヴィクトリア朝に至るまでの約半世紀にまたがり、社会史の上では封建主義社会の末期から商業資本主義社会の確立されるに至るまでの過渡期に位置して、その間の時期に大きく開花した文学運動であると規定しておいて一応誤りが無い。この時期の英国はその社会史のうちでも最も激しい変動の一つを体験したものと考えられているが、1760年を境とした約50年間に鉄と石炭の生産高が殆んど200倍を超えたという事実、1700年に500万であつた人口が1750年に600万、1800年に900万、1820年には1400万にまで増加したという事実、Watt が Steam-engine を作つたのを軸として、Cartwright の紡織機、Derby の採炭製鉄業、Fitch の蒸汽船、Fulton の外輪船、Stephenson の機関車、等々が相次いで現われたという事実、要するに社会変動の最も fundamental な諸契機 一生産力一 が殆んど信じられぬほど飛躍的に増大したという事実が、この間の変動の過程と性格の正しい把握を与えている。

生産力の増大が或る段階を越えれば、従来の経済上の諸関係は自然に崩壊して新しい安定を求めようとして移行しはじめる。農村の副業であつた各種製造業殊に紡績業は、“home-manufacture system” から徐々に“factory system” へと移つてゆく。都市、交通の発達には金融と商業の発達を促して新しい意味の資本を形成し、工場に、土地に、貿易にと投資される。大規模な enclosure は共有地、小作地、小農の私有地を次々と呑み込んで、大地主による農場経営へと交替してゆく。畢竟、古典的な unity を保つていた経済構造が崩壊し、再び一致

することのない二つの階級の発生と対立をはらんだまま、「資本主義経済構造による一応の安定へ、という過程を繰りひろげていったのである。プレハーノフの公式は「生産諸力によつて条件づけられた経済的諸関係」までを下部構造として取り扱っているが、バイロンの呼吸した社会の示した他の総ての現象の性格は、まさにこの経済構造の移行の過程という一点に集約されている。

1812年、バイロンが上院の演壇に立つて、

'The police, however useless, were by no means idle: several notorious delinquents had been detected—men, liable to conviction, on the clearest evidence, of the capital crime of poverty, men who had been nefariously guilty of lowfully begetting several children ……I cannot see the policy of placing the military in situation where they can only be made ridiculous. As the sword is the worst argument that can be used, so it should be the last. In this instance it has been the first.'⁽¹⁾

と論じたとき、それが人々に与えた感嘆の効果の割には、「Nottingham Frame-breaking Bill」そのものは、この社会の「政治的諸制度」がはらんでいた問題のほんの氷山の一角を示しているに過ぎなかつた。歴史に残っている暴動だけでも Spa-Field Riot (1816), March of Blanketers (1817), Peterloo Masacre (1819)等を数えることができる。政府は Combination Act (1799, 1817) によつて労働者の集会を禁じ、Habeas Corpus Act を三たび停止することによつてこれに報いた。凡ゆる社会制度のうちでも、家内工業を奪われた農民から立法的に土地まで奪った地主貴族が、ナポレオン戦争中の地代と穀物の高騰を例の Corn Law (1815) を成立させることによつて殆んど暴力的に維持させた事件ほど、この社会の性格をよく物語っているものはない。再び、二つの階級の新しい発生とその対立を資本主義という形態に安定させていつたこの時期の経済構造の移行の過程が、この社会の他の総ての現象の性格を規定している、と云わねばならない。

時 代 精 神

イギリスばかりでなく全ヨーロッパにわたつて古典的な アンシヤン・レヂームの世界が崩れはじめたとき、その著しい指標の一つとなつたものはフランス革命であつたから、「個人の自由」と「自我の解放」はあたかもこの頃の時代精神を表明する合言葉のようにも見えた。バイロンがこの時代に生きた一人であつたという限りにおいては、彼がその作品を通して絶えずこれらの理想を表明してきたという見解に誤りはない。このことを要約して、C. M. Bowra が 'For Byron, as for some of his contemporaries, the failure of the French Revolution was a challenge to put its ideal into action, and chief of these was the belief in personal liberty and in the importance of the individual man.'⁽²⁾ と書いているのは全く正しい。一方、現実において "The Regency" の社交界がロンドンの貧民窟と著しい対象をなしているとき、個人の自由はしばしば絶望的な反逆を、自我の解放はしばしば背德的な嗜好を意味する結果となつていたから、バイロンに関して再び Bowra が、 'Byron knew how difficult this ideal was to realize and what powerful obstacles it met in the corruption of society and the contradictions of human nature. He made many discoveries, seldom creditable, about himself and other men, and that is why at times he seems cynical and disillusioned.'⁽³⁾ と書いているのも全く当然と云いうる。そして、真の時代精神は、バイロンが示した社会的現実の把握の中に、理想と現実のカイ離という認識の中に、抽象的に存在していたのである。

バイロンの詩はしばしば支配するものへの反抗の叫びを歌い上げる。地主のドン欲に対して、保守政権の反動に対して。

Safe in their barns, these Sabine tillers sent
Their brethren out to battle—why? for rent!
Years after years they voted cent per cent,
Blood, sweat, and tear—wrung millions—why? for rent!
They roar'd, they drank, they swore they meant
to die for England — why? — for rent!

(The Age of Bronze, XIV, 618~23)

Shut up the bald-coot bully Alexander!
 Ship off the Holy Three to Senegal;
 Teach them that "sauce for goose is sauce for gander,"
 And ask them how they like to be in thrall?

(Don Juan, XIV, lxxxiii, 1~4)

しかしながらこれらの詩句が反抗を主題としているからといって、それらが単に支配される階級の声を代弁しているともなされることはまずあるまい。既に、'Why then live?—for rent!' の中に金切声に近い悲鳴を、'and ask them how they like to be in thrall?' の中に絶望に近い冷笑を、それらを読み取るのに、さして感度の良さを必要としないように思われる。"Childe Halold" 第三巻の最初を飾る

Since my young days of passion—joy or pain,
 Perchance my heart and harp have lost a string,
 And both may jar:

に始まる一連の自己表明の中に、また、しばしば絶唱と讃えられる

So we'll go no more roving
 So late into the night,

に始まる抒情的冥想の中に、むしろ人口にカインヤしたバイロンの詩のすべての中に、反抗と背徳の結果する物憂い絶望感がいつも溢えられていることは容易に指摘できることである。バイロンの詩がしばしばかもしだすこの種の反逆的な気ハクと絶望的な感覚との不思議な混コウの中には、この社会に生きた人々にのみ新鮮に感ぜられる或る必然的な *mentality* が表現されており、そして再び、真の時代精神はこの不思議な混コウの中に象徴的に存在していたのである。

二 律 背 反

バイロンは荘嚴な思想詩 "Manfred" を書きながら、洗濯屋の妻君やパン屋の妻君と不義を働いたといつてしばしば非難されている。M. Arnold のバイロン論の中に見える "This beautiful and blighted being was at bottom a coxcomb. He posed all his life long."⁽⁴⁾ という言葉は幾通りもの解釈を生んだが、若しそれが彼の作品世界と実人生との間の落差を対象としているのなら、この場合一応問題にならない。しかし、若しそれがバイロンの内部で彼自身も気付かないうちに起つたある種の分裂に関しているのならば、やはりその波及するところは幅広く根深い。"To withdraw myself from myself (oh that cursed selfshness!) has ever been my sole, my entire, my sincere motive in scribbling at all." と日記に書いたとき、彼は誰よりも先に自己をとらえようという狩猟に、とらえられた自己の中にとらえた自己だけ不足しているという果てしない狩猟に狩りたてられていたのだと想像される。とらえる自己が実体ならばとらえられた自己はポーズと呼ばれることもできよう。自己トウカイと呼ぶにせよ自意識と呼ぶにせよ、一人の人間を再び一致することのない分裂にまで狩りたててゆく近代的疾病の基因は、彼の住んでいる社会そのものの二律背反的な性格にまでさかのぼらなければならない。このことは、下部構造の中に生じた二元的因子が社会的諸制度全般にわたる二元的対立をもたらしたのと全く同じ経過をたどつて、時代精神の様々の示顕の中に見られた二律背反的性向が一人の詩人の内面世界の中にも決して合致することのない分裂を引き起したということに外ならない。Jungfrau の絶頂に立つた Manfred が、

But we, who name ourselves it's sovereigns, we,
 Half dust, half deity, alike unfit
 To sink or roar,

(Manfred, I, ii, 39~41)

と独語するとき、この一種の人間観の表白の中に、また、Alpsの妖女が Manfred に向つて

I know thee for a man of many thoughts,
And deeds of good and evil, extreme in both,
Fatal and fated in thy sufferings.

(ibid, II, ii, 34~35)

と呼びかけるとき、この一個の人間像の表示の中に、これらの中にバイロンの内面世界の分裂の最高の地点を認めることは一応可能であろうと思われる。‘half dust, half deity,’ 或いは ‘good and evil, extreme in both’のごとく両極端の属性がその分裂を暗示するに到れば、それは

‘Before thee at thy quest their spirits are—
What wouldst thou with us, son of mortals—say?’
‘Forgetfulness—’

‘Of what—of whom—and why?’

‘Of that which within me; read it there—’
.....
.....
.....

Oblivion, self-oblivion

Can ye not wring from out the hidden realms

Ye offer so profusely what I ask?’

‘It is not in our essence, in our skill;

But—thou may’st die.’

(ibid I, i, 134~148)

という Seven Spirits と Manfred の対話にまでは必然的に通じているわけであつて、破局に面したその分裂も既に変向点の直前に立つていることを示している。十九世紀初頭の社会史の中で二つの階級の対立が激化から安定に向つた瞬間を指摘することができないのと同じように、バイロンの内部に起つた自己分裂もその変向点を明示することはできない。しかし、彼がその生涯の終りに Misolonghi の自室で、

Temperate I am—yet never had a temper;

Modest I am—yet with some slight assurance;

Changeable too—yet somehow ‘Idem semper’:

Patient—but not enamoured of endurance;

Cheerful—but, sometimes rather apt to whimper:

Mild—but at times a sort of ‘Hercules furens’:

So that I almost think that the same skin

For one without—has two or three within.

(Don Juan, XVII)

という自己認識を口にし得たときには、この詩人にたどり得る唯一の道をたどつて、やはり一つの安定点に達していたと見ることができる。

逃 避 性 向

バイロンの作品の初期を彩っている一群の epics—“The Giour” に始まつて “The Bride of Abydos”, “The Cosair”, “The Lara” と続く一連の作品系列が、現在では殆んど鑑賞の対象となり得ないからといって、それ

が“Childe Harold I, II”によつて燃え上つた“Byron Fever”に一層油をそそぐ結果となつたという事実と矛盾しているわけではない。“Byron Fever”の基因はやはり浪漫派運動一般の或る特質に通じている。因みに、M. Arnold が、‘So slovenly, slipshod, and infelicitous’ とときおろして以来絶えず決定的なカキンとして指摘される「誇張された用語、手垢のついた韻律、間違ひだらけの文法」等、文体の粗雑さすらも、古い秩序の崩壊とともに古典的なタンレイさに目をそむけはじめたこの社会の人々だけが感ずる或る独特な通俗的面白さというものに支えられていたと考えられないわけでもないのであるから。ところで、これら一群の epics を書き飛ばしてゆくに当つてバイロンは、まるで一つの obsession にとりつかれているかのごとくに、situation の設定を例外もなく異国の風物の中に求めようとしている。“Childe Harold I, II”の魅力に関する‘The poem owed its attraction to the picturesque and romantic scenes.’⁽⁶⁾ という J. C. Smith の発言は、このバイロンの obsession を通つて更に浪漫派運動の一つの特質—exoticism—の問題にまで言及していると思われる。つまり“Giour”への熱狂と“Kubla Khan”への陶酔とは、その発生を一つの基因—逃避性向—に負うていたのである。

十九世紀前半の英国社会史の中で、階級的対立の一つの頂点を示した「マンチエスターの毛布行進」や「ピータールーの虐殺」から、「栄光のヴィクトリア朝」という一応の安定点に到るまでの間に、英国がインド、カナダを中心として概ね全世界にまたがるいわゆる第二帝国の植民地システムを殆んど確立してしまつているという歴史的事実は、この場合極めて興味深いことのように思われる。決して一体となる筈のない階級的対立は、それから目を背けるか、それを無視するか、少くとも対立を対立として意識しない次元に達することによつてのみ一つの安定に達することができるわけで、この時代においては、植民地からの巨大な富の流入が彼らの好むと好まざるとにかかわらず、或る必然の勢いをもつてこの種の安定に到達せしめたのであつた。ここにおいて、海外への関心が文学作品への素材の撰択に影響を及ぼしたというほど性急な立論は当然避けられねばならぬとしても、文学の世界を含めてこの社会全体にわたつた二律背反的な分裂の傾向は、詩人たちの意識や意欲の力の限界を越えてexoticism への逃避の中にその次元を一つ高めることができたとまでは十分に云い得るのである。

これと全く同じ事情は、やはり浪漫派運動の一つの特質として数えられる love for nature の中にも見出すことができる。Wordsworth の自然讚美が

These beauteous forms,
Through a long absence, have not been to me
As is a landscape to a blind man's eye:
But oft, in lonely rooms, and 'mid the din
Of towns and cities, I have owed to them,
In hours of weariness, sensations sweet,
Felt in the blood, and felt along the heart;
.....
.....
.....
To them (Nature) I may have owed another gift,
Of aspect more sublime; that blessed mood,
In which the burthen of the mystery,
In which the heavy and the weary weight
Of all this unintelligible world,
Is lighted:

(Tintern Abbey, 22~41)

に見られるように、いつもその讚美の心を現実生活の‘weariness’⁷ 或いは‘heavy and weary weight’によつて裏打ちされているということは、浪漫派運動の特質の持つ逃避性向を何よりも雄弁に物語つている。バイロンのどの系列の詩にも絶えず見出される自然讚美の詩句のうちで、“Childe Harold IV”の中に見える次の stanza

は、余りにも好都合なので凡ゆる comment を拒否しているかのようにさえ見受けられる。

There is a pleasure in the pathless woods,
 There is a rapture on the lonely shore,
 There is society, where none intrudes,
 By the deep sea, and music in its roar :
 I love not Man less, but Nature more,
 From these our interviews, in which I steal
 From all I may be, or have been before,
 To mingle with the Universe, and feel
 What I can ne'er express, yet cannot all conceal.

(CLXXVIII)

諷刺文学

“Childe Harold’s Pilgrimage”と“Don Juan”とはそれぞれバイロンの詩作の初期と後期を代表する傑作としてしばしば見なされている。バイロンの詩集には、“Childe Harold”と“Beppo”と“Don Juan”とを別にして、他の総ての作品を抒情詩、物語詩、劇詩、諷刺詩の四つの系列に分類して載せているものが多く見受けられるが、このことは、“Childe Harold”と“Don Juan”とがやはりそれぞれの時期における総ての系列の詩のいわば集大成的な作品であることを示しているとも考えられる。“Childe Harold”と“Don Juan”の関連については、殆んどバイロン研究家が常に触れている問題で、この点に関して小川和夫氏はその著「ドン・ジュアン」の中で、「ドン・ジュアンという人物は、どこにでも姿を現わし得る非実質的人間なので、この点はバイロンの青春期の代表作である『チャイルド・ハロルドの巡歴』の主人公とかわりないのである。ドン・ジュアンも公子ハロルドも、作者が自分の感情や思想を思うがままに吐露する機縁として設定されたものにすぎない。しかしこの二つの作品のあいだには決定的な差異がある。チャイルド・ハロルドは成長期のバイロンの悲傷をになわさされていて、それが同時に十九世紀初頭のイギリス浪漫主義のもたらした新しい人間のタイプを示しているのであるが、ドン・ジュアンはまさしくこの青春時の自己の肖像をパロディ化したものにほかならないからである。『チャイルド・ハロルド』においてはバイロンは自分のうちに見出した新しい感性、彼にとつても新しいものであるとともに社会にとつても『一朝にして作者を有名ならしめた』ほど新しいものであつた感性に酔い痴れていて、その感性の奔流のままに押し流され、胸中に湧きあがる歌をのこりなくうたいあげたのであつた。」更に続けて、「『ドン・ジュアン』では迷妄から解き放たれた経験が発言しているものであり、社会の偽善にたいする痛烈な諷刺を旨としているのである。チャイルド・ハロルド的な悲調も、時としてあらがえぬ勢いで姿を見せるにせよ、それはすぐに比重を同じくする判断、ときとして嘲笑にとつてかわられて、その結果この作品は見事な均衡を得てきている。」のごとくに触れている。一方“Beppo”と“Don Juan”との関連については普通はあまり触れられることがなく、小川和夫氏も、“Don Juan”の詩形について述べたあとで、ただ「この詩形による試作は『ベツボウ』である。」とだけ触れてそれ以上の関連性については解説を試みていない。しかしながら、“Beppo”がバイロンの最後の大作“Don Juan”に至るまでの詩の系譜の上での占めるべき地位は、詩形の上で試作品というに止まつているとは考えられない。もともとこの“Ottava rima”という詩形が romantic narrative に用いられるものであつたことから、バイロンもこの詩形を試みるに当つては、その situation の設定その他を殆んど彼の手馴れた epics のそれにおぼきまつてしまつている。ただこの作品の中では従来どの epics の主人公にも附与されていた英雄的風ボウ、背徳を背景とする奔放な行動、悲劇的な結末等の plot の展開に示された諸特質が完全に影をひそめて、どこか cynical らしい皮肉まじりの笑い話に仕立てあげられている。作品世界の完結度という点では殆んど問題にならないとしても、バイロンの全作品の中でこの種のものは“Beppo”ただ一つしかないという事実は十分注目に値する。小異を捨てて大同をとれば、lyrics から“Don Juan”への道程を“Childe Harold”が導き、epics から“Don Juan”への道程を“Beppo”が導いたという図式さえ成り立つといえるのである。“Ottava rima”の“Don Juan”への適合性に関しては、“The ottava rima with its easy progress is well adapted

to story-telling, and the clinching couplet in each stanza gives excellent opportunities for epigram such as were denied by Spenserian stanzas of Childe Harold. The easy flowing stanzas suit Byron's different effects, and though they lack polished art, they are a perfect vehicle for what he has to say. They are so flexible that in them Byron's carelessness does not matter and indeed becomes a virtue, since it is part of his conversational manner. All kinds of elements pass easily into his style. It is equally suited to lyrical description and scurrilous satire, to sustained narrative and personal outbursts, to stately declamation and slopdash slang. The brilliantly ingenious rhymes keep it fresh and lively, and the sprightly, uninhibited movement of the stanzas is in perfect accord with the darts and flashes of Byron's mind.'⁽⁶⁾ という C. M. Bowra の解説が、少し一方的なきらいはあるにしても、概ねその要を言いつくしてしまっている。バイロンの詩が technique の上でこの武器を手に入れたとき、彼の詩作の終着点への道は決定的なものとなつたと云えるのである。

二元的な対立の世界において、その対立を対立として意識しない世界にまで次元を一つ高めることが逃避性向の本質であるとは前にも触れた。再び C. M. Bowra が、*'The moods of admiration and mockery exist concurrently in him and are emerged in his outlook,.....His emotions and his intelligence were at war, and through wit he found some sort of reconciliation between them.'*⁽⁷⁾ と書いているごとく、バイロンの中に見られた総ての二律背反的な性格は、対立に何等の意味をも認めようとしぬい諷刺文学という地点に達することによつて完全にその世界の次元を一つ高めることを可能とした。繰返して云えば、彼の生きた社会の他の総ての現象を象徴するかのごとくに、バイロンは *cynical point of view* に立つことによつてその安定点に達し得たと云えるのである。

引用書目

- (1) E. C. Mayne : "Byron" ; Mathuen, 1924
- (2) C. M. Bowra : "The Romantic Imagination" ; Oxford Univ., 1949
- (3) ibid
- (4) M. Arnold : "Essays in Criticism" ; Macmillan 1889
- (5) J. C. Smith : "A Critical History of English Poetry" ; London 1950
- (6) C. M. Bowra : "The Romantic Imagination" ; Oxford Univ., 1949
- (7) ibid

附記

詩の引用は総て "Oxford Editions of Standard Authors" の "The Poetical Works of Byron" に依つた。